

土とふるさとの文学全集

3



土とふるさとの文学全集

4

土に生きる

現実の凝視

昭和五十一年十一月二十日 発行

編集人
白井吉見
小田切秀雄
瀬沼茂樹

水上新勉
和田傳

発行者
高橋芳郎

東京都新宿区市谷船河原町十一(〒162)

発行所
法人 団家の光協会 ©

電話 (260) 三一五一(大代表)
振替 東京 514724

印刷 大文堂印刷株式会社
製本 寿製本株式会社

土とふるさとの文学全集 ③

炭焼のむすめ

長塚 節 7

五月幟

正宗白鳥 13

牛部屋の臭ひ

正宗白鳥 23

藁

田山花袋 46

南小泉村

眞山青果 51

千曲川のスケッチ

島崎藤村 91

小作人の死

小川未明 155

死滅する村

小川未明 172

地獄

金子洋文 183

宝篋印塔

悦田喜和雄

206

朽助のゐる谷間

井伏鱒二

215

黒い地帯

佐左木俊郎

229

浮動する地価

黒島傳治

241

白楊木

野口赫宙

254

追はれる人々

野口赫宙

257

今日様

葉山嘉樹

272

赤剥け

藤島まき

289

ところはちぶ

橋本英吉

307

櫂の芽立

橋本英吉

317

支流を集めて

打木村治

337

草深し

金史良

354

土城廊

金史良

370

橋のある風景

齋藤利雄

391

張徳義

長谷川四郎

403

荷車の歌

山代巴

416

牛

井口克己

499

春

吉野せい

517

梨花

吉野せい 522

赭い畑

吉野せい 529

解説

西田 勝 537

年譜

551

装丁

伊藤 憲治

編集協力

南雲 道雄

葦山 圭介

赤星虎次郎

炭焼のむすめ

長塚 節

一

低い樫かしの木の下に藤の花が垂れてる所から小径こみちを降りる。炭焼小屋がすぐ真下に見える。狭い谷底一杯になつて見える。あたりは朗かである。トーントーンという音が遙に谷から響き渡つて聞える。谷底へついて見ると紐のちぎれそうな脚絆かきんを穿いた若者が炭竈すすきの側で樫かしの大きな榎えへ楔くさびを打ち込んで割つていたのであつた。お秋さんが背負子せおひこというもので榎を背負つて涸れた谷の窪みを降りて来た。拇指おやびを肋はらばの所で背負帯せおびに挟んで両肘を張つてうつむきながらそろそろと歩く。榎は五尺程の長さである。横に背負つて居るのだから岩角へぶつかりそうである。尻しりの紺の仕事着に脚絆をきりつと締めて居る。そうして白い顔へ白い手拭を冠つたのが際立つて目に立つ。積み重ねた榎の上へ仰向になつて復た起きたら背負子だけが仰向の儘ままの楕へんの上に残つた。お秋さんは荷をおろすと軽げに背負子を左の肩に引ひつかけて登る。こちらを一寸見てすぐ伏

目になつた。矢やつ張はそろそろと歩いて行く。榎を運んで仕舞つたら楔くさびで割つたのを二本三本ずつ藤蔓の裂いたので括くりはじめた。両端を括くつて立て掛ける。余つて程重そうである。これが即ち炭木である。女の仕事には随分思い切つたものだと思つた。

小屋へ腰を掛けて居ると鵲うすまきが時々虫を銜くはえて足もとまで来ては尾を揺しながらついと飛んで行く。脇へ出て見ると射干ひやうかんが一株ある。射干があつたとて不思議ではないが爺さんの話が可笑しいのだ。山の中途でいかな時でも水が一杯に溜つて居るので一杯水といつて居る所がある。そこに此草があるので、極暑の頃になると赤い花がさくのだと頗る自慢なのである。それで唯赤い花がさく草と思つて居るに過ぎない。可笑しいといつてもこれだけだ。

谷底の狭いだけに空も狭く見える。空は拭つたようである。其蒼天へ向いてずっと延びた樫の木がある。根の生え際に小屋の屋根からではずつと上にあるので猶更に延びて見える。梢で小鳥が啼き出した。美音である。何だと聞いたら爺さんが琉璃るいだといつた。そうして解らぬことをいつた。小屋へ二つもくうのは珍らしいことだ。一つがくうと安心だと思つて鵲うすまきがまたくつたのだ。つまり人間を手頼たよりるのである。然しあんまり覗くと蛇が狙つていかぬ。こういうことを云つたのである。不審に思つたから再び脇へ出て見たら、杉皮が僅に雨を覆うて居る橋端はしはたの手の届く所に鳥の巢が二つならんである。射干のすぐ上である。子鳥はどちらも毛が十分に延びて居る。巢は思ひの外に粗末で草がだらけ出して居る。轟とどろに出て見たので見つかつたことと思つたに相違ないのだ。早合点をしてあんなことをいつたのだ。自分は竊ひそかに微笑せざるを得なかつた。弁当をつかうのでお秋さんがお茶を汲んで山芋を一皿呉れた。お秋

さんは草鞋をとった丈で脚絆の儘疊へ膝をつけて居る。自分へ茶を出すため態々あがつたのだ。なぜだという土瓶へ二度目の湯をさしたらすぐに草鞋を穿いたからである。山芋は佳味かつた。山芋の続きが猪へ移った。清澄には猪が居る。猪は山芋が好きで見つけたら鼻のさきで掘って仕舞う。「うっかりすると曲角などで鼻のさきを真黒にしたのに出っかわすことがあります」とこれは爺さんの愛嬌癖である。「あの雨の降る日などにはそこらの木まで猿がまいます」とお秋さんが傍からいった。お秋さんは滅多にいわぬ。自分は何か物をいわして欲しかったのだから、糸口が開けた様に思われてこれだけが満足であつた。射干が急に延び出して赤い花が目前に開くのを見る様な心持である。これが谷の二日目である。

二

炭を出す所である。炭竈の口を突き崩したら焰がぼつと一時に吹き出した。自分は思わず後へ下つた。炭竈のなかは真赤なうちに黄色味を帯びた烈々たる凄まじい火である。樫の二間余の棒のさきへ鍵の手をつけたのを以て爺さんがそれを掻き出そうとする。炭竈の前は眉毛も焦げることと思う程熱い。こんな大きな棒が果して使えこなせるものかと怪しみながら見て居ると、天井から藤蔓で自在鍵のようなものをさげた。樫の棒はこれへ乗せ掛けたので差引が容易になる。案外な工夫である。これだから重い方が落ちついて扱いいのだと笑いながら鍵の手を真赤な炭に引つ掛ける。炭の折れることがあるとかちんと石のような響がする。樫の棒は見るうちに火がついてぼつぼつと燃える。燃えても構わずに掻

き出す。遂にはじゅうつと傍の流へ突っ込んで、更に水に浸して置いた鍵の手で掻き出す。少し掻き出すと一つに寄せてそれへ灰を掛ける。一遍出したら爺さんの顔も焼けた様に真赤になった。

お秋さんはどこからか青葉のついた小枝をさがさという程掻つ切つて来た。炭は既に灰から掻き出されてあつたがお秋さんは直炭の碎けを篩い始めた。乾燥し切つた灰は容赦もなく白い手拭へ浴せかかる。それで粉炭がどれだけ有つたというの俵の底が隠れるだけであつた。直に炭を俵へつめる手伝にかかる。青葉のついた小枝はぐるっと丸めて俵の尻へ当てるのであつた。

お秋さんはこんな忙しく仕事をして居たと思つたら、ふと見えなくなつた。自分は谷が急に寂しくなつた様に感じた。尋ねるというでもなく昨日炭木の運ばれた窪みを登つて行つた。真急な崖へ瘤のようにいくつもぼくぼく出た所に、草鞋で踏んだ様に土のついた趾がある。瘤へ手を掛け足を掛け登る。お秋さんはその窪みに独で枯木を挽いて居た。傍にはもう十本ばかり薪が積んである。窪みは深さも大きさも皿程である。密生した樹立は雫も滴るかと思われて薄暗い。自分は薪へ腰を掛けた。お秋さんの手拭の糸目の交叉して居るのまでがはつきり見えるまでに近寄つた。お秋さんは両足を延して左を枯木へ乗せて居る。鋸を押したり引いたりする毎に手拭の外へ垂れた油の切れたほつれ毛がふらふらと揺れる。懶い様な鋸の音の外には何の響も無い。お秋さんは異様な真面目な顔で鋸から目を放さない。自分も腰を掛けた儘ほつれ毛と白い襟元とを見詰めて居るばかりである。物をいうのも悪いが黙つて居ても却て極りが悪い。構わずにずんずん話を仕掛けたら善いじゃないかといつたってそりゃそうはいかぬ。兎に角自分から口火を切つた。どんな事で

口火を切つてどんな塩梅に進行させたかといったってそれも言えぬ。お秋さんは余計にはいわぬ。何処までも頼ましいのである。唯こういうところがあるのだ。此山蔭では蛙を「あんこ」ということや、蟾蜍を「けんどんぼう」というのだということやである。それから茸採りに行つて沢山あるということを「へしもにへしもある」というのだということであつた。これでは笑わずにはいられなかつた。自分は忘れた時の為めにと手帳を出したら偶然どこかの盆踊唄というのが書いてあつたのを見つけた。「ことしの盆はぼんとも思わない、こやが焼けても、もかりがぶつこけて、ぼん帷子を白できた」というのである。これを聞かしたら「ぼん帷子を白できた」というのを繰り返しながら暫くは鋸の手を止めて居る。そうして自分を見た時にはいくらか寂しみを帯びた温かい微笑を含んで居つた。此所にもこんなのが有りますと云つて、「大沢行川の嫁子にならば花のお江戸で乞食する」というのを低い声でいつた。謡つたのではない。謡えば面白いのだが、お秋さんには逆でもそんなことを為せて見ようとして出来ないから駄目だ。それどころではない。少し聞き取れぬ所があつたので折り返して聞いたら赤い顔をして仕舞つたのである。これが谷の三日目である。

三

一日抜けて五日目になる。宿で麦酒の明燐へ酒をこめて貰つた。八瀬尾へ提げて行くのだ。爺さんの晩酌がいつも地酒のきついで我慢して居るのだと知つたからである。樟の造林から廻る積りで道を聞いて行つた杉の木深い沢を出抜けたら土橋へ出ないで河の岸へ降りて仕舞つた。

変だと思つたが向うの岸に人の歩いたという様な趾が見えたから水を涉つて行つて見た。芒や木苺の刺が掩いかぶさつた間に僅に身を窄めて登るだけの隙間がある。段々行くと木苺の刺が引つ掛る。荊棘はいよいよ深くても行かれる所でない。酒の罌も岩へ打つつけたらそれ迄である。木苺を採つて食つた。黄色い玉のふわふわとして落ち相になつたのは非常に甘い。木苺といつても六尺もあるのだから手を延して折り曲げねばならぬ。ふと自分の近くの青芒の上に枝がかぶさつて真黄な花のさいているのに気が着いた。皂莢のようで更に小さい柔かな葉が繁つて花はふさふさと幾つも空を向いて立っている。すぐさま枝に手を掛けると痛い刺が立つた。放そうとしても逆さに生えた刺なのですぐには放れぬ。漸くで二房三房とつた。豆の花と同じ形のが聚つているのである。少し隔つてから振り返つて見ると滴る様な新緑の間にはつぼつと黄色い房のあるのは際立つて鮮であつた。あとで聞いたら雲実とも黄皂莢ともいう花であつた。

岸が高いのに水が浅いというのであるから兎にも角にも川をのぼつて行くことにした。樟の造林へは諦めをつけたのだ。季節は急に暑くなつて一両日このかた単衣に脱ぎ替えたのであるから水を引くのは猶更心持がよい。

ころころという幽かな様な声がそここに聞える。ぼしゃぼしゃと音を立てて行くに近い声はたと止つて何か知らぬが水へ飛び込むものがある。能く見ると底に吸いついている。そつと近づいて急に上から押えつけて攫えた。蛙に似て瘦せこけたものだ。自分は必らず河鹿であると悟つた。河鹿に極つていゝのだ。図解以外に河鹿を見るのは今が初めてで素より攫えて見たのはじめてである。幽かなような鳴声であつたの

だ。自分は嬉しくて堪らなかつた。水の浅く且つ清いにも拘らず河鹿は底に吸いつくと隠れた積りでじつとして動かぬ。自分は面白い儘に尚三匹ばかり採った。そうして水際に生えてる落の葉を採ってそつと包んで萱の葉で括った。疎らな杉の木立に糸のような菜種なづなのくさによると背比べをして咲いて居る所へ出た。比処までは二三日前に來たことがあつたから八瀬尾の近いことも分つて安心した。お秋さんは一人で醋酸石灰——之はどういうものかというと炭竈の煙を横につないだ土管のなかを潜らせれば煙は其間に冷却して燻り臭いひどくすっぽい液体になる。其のすっぱいことといったら頗いあがるようだ。これが木醋というので、これへ石灰を中和して仕上げたのが醋酸石灰で曹達で仕上げたのが醋酸曹達となるのだ。説明はもう十分として置く——を造つて居た。酒の燻はお秋さんへ渡した。お秋さんはまあ済みませんといいつつ丁寧に辞儀をしてすぐに炭竈の方へ行つた。河鹿は傍の水へ放した。鳴けばお秋さんが聞くのだ。毎日自分と一所にお秋さんの許へ落ち合つた島の人は此日はとうとう來なかつた。島というのは佐渡のことで、佐渡の国から造林の見習に來て居る男で、佐渡には金北山という山がある筈なのにどうしたものかこんな山へ來てこれ程大きな峻しい山はまだ見たことが無いといつて驚いて居る男である。苗字が「けら」というのだとかで虫のよくな面白い人ですなとお秋さんがいつた男である。此男が來なかつたので何故だか心持がよかつた。

お秋さんは自分が樟の造林へ行けなかつたことを非常に氣の毒に思つたらしかつた。爺さんも炉の側へ來て居てお秋さんの弟に案内をさせようというのである。爺さんは小屋へ來れば屹度炉の側に坐る。暑くつても坐る。弟というのは体が図抜けて大きいのでまだ十五だといつても

自分よりは目から上程も大きい。のっそりとして草履の下へ入れた小石をこりこりとこすつて行つて行くとも行かぬともいわぬ。恥かしいのだ。お秋さんが脇へ連れて行つて何かいつたらそれで行くことに成つた。草履の丈夫なのを探して居る。こうして居る所へ汚い着物を着た十三四の男の子が山桑を摘んで網に入れたのを背負つて登つて來た。お秋さんの側に寝て居た白犬が其子の足もとへ突然噛みつく様に見えた。男の子は泣き出し相になつて自分等の所へ駆けて來た。お秋さんは赤い顔をして微笑しながら白を叱つた。叱つたといつてもやつとのことではない。白は再びお秋さんの側へ寝た。男の子の手に持つて居るのを取つて見たら櫓の柔かに延び出した小枝のさきに青い団子のようなものが二つくつついて居るのである。櫓の木にはよくあるのである。お秋さんはそれを見て「ふぐり見た様ですね」といつた。自分は意外であつた。お秋さんは真面目である。能く聞いて見たらふぐりといつたのは鳶とんびのふぐりということと蟪蛄の卵のことだ相である。

四

六日目は谷も畢りの日である。此日は極めてはやく行つた。自分は既に八瀬尾の谷を辞する積りであつたがお秋さんが自分のために特に醋酸曹達を造つて見せるという事であつたから一日延すことにしたのである。お秋さんはもう仕事場に仕度をして居る。爺さんは炉の側であつたが何か冴えない顔である。聞いて見ると小さな変事が起つたのだ。これは琉璃の子が一匹残りに居なくなつたという事なのである。夜明に蛇が來たに違いない。昨日籠へ取ろうと思つて居たのに少しの油断でいまい

ましいいことをしたと情れる。親鳥は低い木の枝に止ってまだ騒ぎがやまない。怒を含んだ形であろうか、上へ反らした尾を左右へ動かして居る。鵲鴒までが小さな声で鳴きまわって居る。

此日は忙しくないと見えて爺さんは炉の側に居て種々な雑談を仕掛ける。何時か琉璃の方は忘れて山口屋の風呂は世間に二つはあるまいという様なことをいって笑う。自分の宿のかみさんというのは、大氣連で、犬に床まで敷いてやるという位な変な人間であるから風呂までが變つて居るという訳ではあるまいが兎に角變つて居るのである。表の障子は崖と相對して崖には洞穴がある。風呂は其洞穴の中だ。宿の女に案内されて闊い所へ這入った時は妙な心持であつた。着物を脱げといわれて見ると板の間がある。ぼんやりながら段々に見えて来るといわけで、六畳間位に割り抜いてあるのが焚火の煤で余計闊くなつて居るのだ。誰でもはじめは妙な心持がするであらう。

お秋さんの造つた曹達は純白雪の如き結晶である。これは食料の醋酸を造る原料である。下手がやると醬油のような色になることがあるからだ。曹達を造つたら暇に成つたと見えて小屋へ来て腰を掛けた。手拭を外した所を見ると髪はぐるぐる巻で今日は珊瑚のような赤い玉の簪を一本挿して居る。自分は考えた。お秋さんはまだ年が若いのであるに草鞋こしで毎日毎日仕事に日を暮して居るのである。愈しいものがあつたとて此狭い谷底にばかり住んで居る身に何の役に立とう。手拭だけが身だしなみである。白い手拭は平生に於ける唯一の装飾品である。仕事とというのが随分骨が折れる。薪を採つてそれを真木割で裂いて干して置く。石灰に塊があれば臼で搗いて置く。忙しい暇には炭俵を坂の中途の小屋まで背負いあげる。醋酸石灰でも曹達でも特別の技倆があるので其

製品は名人で売り出されて居るのであるが、一日の給料といったら僅に二十銭に過ぎない。それで老父を助けて忠実に労働して居るのである。お秋さんは鼻筋の儘な稀な女である。然し世間の若い女の心に満足と思わねべきことは一つも備わってない。こう思うとなんとなく同情の念が思わね起るのである。

自分が暇を告げて出たらお秋さんは背負子せおこを負うて坂の中途まで行つて居た。坂を登ろうとする時白は追い返されて降りて来た。自分は忽ちに追いついた。そうしてお秋さんは何処まで行くのか知らんが、歩かれるだけ一所に歩く積りで成るべく静に足を運んだ。お秋さんは「私と一所では暇がとれて迷惑でございましょう」といって頻りに急ぐ。身一つでも容易でないのに能くも足がつづくものだと思つた。「此所へ鹿が立つて居たことがあります」と杉の木の下でいつた。そこには刺がびしより生えて白い花のさいた極めて小さな木があつた。真赤な枸杞くきの実のようなのがたつた一つ落ち残つて居る。珍らしいから一枝折つたら「あらどおしの花でございます」とお秋さんが又いつた。坂を登り切つたら流石さすがに息苦し相に胡蝶花の疎らな草の中へ荷を卸した。背負子を負うために殊更小さな綿入のちゃんちゃんを引つ掛けたので体が何時もより小柄に見えた。手拭をとつたら顔が赤らんで生え際には汗がにじんで居た。うららかな日に幾らかの仕事をしてぼつとほてつて来た時は肌の色の美しさが増さるのである。白いものは殊更白く見える。「あれこんな所に藤の花が」と横の木を見てお秋さんがいつた。藤は散つたのもあつて房はもう延び切つて居る。

樟の大木が掩いかぶさつて落葉の散つてある所を出抜けると豁然かつぜんとして来る。両方が溪谷で一条の林道は馬の背を行く様なものだ。両側には

縦の木の板がならべて干してある。いくらかの臭みはあるが真白な板は見るから爽かな感じである。足もとから谷へ連つて胡蝶花の花がびっしりと咲いて居る。「あなた一寸待つて下さい」といわれて振り返ると「大層臭いようですがアルコールは零れはしますまいか」というのである。背中の襖の中には木醋から採つたアルコールが入れてあつたので、体の揺れる度にいくらかずつ吹き出すのであつた。お秋さんは右の手を抜いて左の肩で背負子を支えて左の膝を曲げてそつと地上へ御した。持つていて呉れというので自分は背負子を支えている。一寸引つ立てて見たら重いのに喫驚した。お秋さんは手頃の石を見付けて来て杓を叩き込んだ。

小さな山々が限りもなくうねうねと連つて居る。格外の高低もない。峰から峰へ一つ一つ飛び越して見たいと思う程一帯に見える。渺茫たる海洋は夏霞が淡く棚曳いたという程ではないがいくらかどんよりとして唯一抹である。じつと見つめて居るとぼちつと白いものが見え出した。漁舟である。二つも三つも見え出した。白帆はもとからそこにあつたのだ。尚じつと見つめて居るとぼちつと白いのが段々自分へ逼つて来るように思われる。遠くはすべてがぼんやりである。谷の梢や胡蝶花の花や縦の真白な板や近いものは近だけ鮮かである。そうして最も近いものはお秋さんである。お秋さんは背負子を岩の上に乗せてくるりと背中を向けて背負つた。

妙見越を過ぎると頂上で、杉の太木が密生して居る。そこにも羊歯や笹の疎らな間にはつはつと胡蝶花が咲いている。一層しおらしく見える。清澄寺の山門まで来ると山稼ぎの女が縦板を負うたのや炭俵を負うたのが五六人で休んで居る。孰れも恐ろしい相形である。山稼ぎの女は

いくらあるか知れぬがお秋さん程のものは嘗て似たものさえも見ないのである。彼等とならんだお秋さんは恰も羊歯の中の胡蝶花の花である。寺の見収めという積りで山門をのぞいて見たら石垣の上の一畝の茶の木を白衣の所化が二人で摘んで居る所であつた。山門の前には茶店が相接して居る。自分は一足先きに出發けて振り返つて見たらお秋さんは背負子を負うた儘婆さん達に取り巻かれて話をして居る。たまたま谷底から出て来ると互に珍らしいのだ。攫えて放されないのであると思つた。お秋さんは人に好かれるというのは極つて居ることなのだ。自分は規則正しく植えられた桜の木の青葉の蔭に佇んで待つて見たがどういふものかお秋さんは遂に來ない。然し茶店まで戻つて見るといふこともしえなかつた。自分は急に油が抜けたような寂しい心持になつて宿へ歸つた。清澄山は自分にはすべてが満足であつた。然しお秋さんと言葉を交して別れなかつたことはどうしても遺憾である。針へ通した糸のうらを結ばないような感じである。

(明治三九年一月)

五月幟

正宗白鳥

一

「穂浪村は人家三百戸」と、小学の教師は二十年も前から児童に教えている。この三百戸の八九分は漁業か農業、あるいは漁農兼帯で生活を立っているが、百八十番地の「瀬戸吉松」の一家は、母は巫女、息子は画工。村に不似合な最も風異りの仕事をしている。で、海が荒れて不漁が続いたり、暴風雨や虫害で麦や稲の充実が悪いと、商人も大工も石屋も畳屋も、あるいは僧侶神主、皆その影響を受けるのだが、ことに吉松一家はひどい。

しかし今歳は漁がよかった。鯛も捕れた、鮪も捕れた。漁夫は沖で釣った魚を売って、岡山や牛窓から縮緬の兵児帯、畳付の下駄、洋銀の簪やら派手な手拭やら、土産物をどっさり買いこみ、なお魚籠には両手で掬いきれぬほどの銀貨や銅貨を残して帰ってきた。明後日は旧暦五月の節句であれば、遠海へ出稼に行ってる舟も、よくよく不漁でない限

りは、久しぶりに陸の塩辛い飯を食いに帰り、浜辺には珍らしく百艘近くの小舟親船が並んでいる。そして吉松は諸方から幟の揮毫を頼まれて、近年になく多忙である。

彼は日限に迫まれ、五六日戸外へ出ず、夜も行灯の側で書いていたが、いよいよ今一つで描き終れるのだ、図題は鎧姿の清正で、ほぼ形だけできあがっている。彼れは禿筆の先で清正の髯を細く描きながら、疲れた肩を左の手で揉んだり、墨の染みた下唇を噛んで、細長い布を見上げ見下している。一筆ごとに凛々しい姿の浮き上るのを見るにつけて、もっと奇麗な絵具が欲しくてならぬ。あの草摺もその臍当も、ほかの色で彩ってみたい。いつぞや大福寺で虫干のあった時、仏様の絵を二三幅見せてもらったが、どれも懐かしい絵具を用いてあって、見ていて何ということなしにいい気持がして、その前を離れたくなかった。あんな絵具は何で拵えるのかしらんが、自分も一年に一度でも、立派な絵具で絹地へ書いてみたいな。

彼れの左右には墨を溶かした飯茶碗と、小さい朱硯と、膳脂と藍を両縁に塗った小皿があるばかり。筆も小学生徒の手習用の一本二銭か三銭のを毛が擦り切れるまで使っている。で、道具には不平を抱いているが、好きな仕事ではあり、第一金が取れるのだから、自然に励みもついて、身体のだるいのも我慢して、筆を運ばせた。家は二室だが、ただ闕で区切つてあるのみで、襖も障子もない。上等の室には床板の上に薄縁を敷き詰め、次の室には座蒲団代りに一枚の席を敷いてある。絵布の裾は席の室へ挟だされ巫女婆さんの膝に触れている。婆さんは片袖をまくり上げ、肥った腕を露わして臼を挽いている。居眠をし通して、朝から掛つてて、まだ一升足らずの粉が挽けきらぬ。

「吉よ、汝やまだ書いてしまわんか」

と、婆さんは附木で粉をかき寄せては張籠に移つてゐる。

「も少しで書いてしまわあ、お母はまだ挽いてしまわんのか」

「お母も、もう一握りでええんじやがの、汝お腹が減つたら、お昼飯にしようか、太陽様もそろそろ隣りの牛小屋へ当りだした」

「そうかな、もう正午過か、そないになるたあ思わなんだ」

「どりゃお茶でも沸そう」

と、婆さんは片手で膝を圧え、「うんとしょ」と伸び上り、凸凹の多い庭へ下りて、柴を一攫を圧折つて茶釜の下へ投げこみ、附木で火を点けた。黒煙が渦を巻いて絵布の上を這い、低い軒下へ流れでる。吉松は青い顔を蹙め、勢のない咳を出した。目を細くして戸外を見た。門口には五月雨の用意にや柴木片を堆高く積んである。空は見えぬが、日は鮮かに石ころ道を照らし、帽子代りに頬冠りして肥桶担った男が、腰を振つて通っている。二三人首を抱き合い、得意気に巻煙草を吹き、ゲラゲラ笑つて村の若い衆が練って行く。「吉マよ」「チビ松」と声を掛けて行く者もある。尻端折り蓑草履を穿いた水汲女が小さい桶を荷つて二人三人続いて通つた。井戸水は塩気があり、山蔭の泉のみが一村の飲料水となるので、盆と節句には泉が乾れると言うが、きゆうに家族の殖えたこのごろ、女房や娘は水汲が一日の大役なのだ。

吉松はその水汲の一人の後姿を見て、お竹じゃないかと思つた。顔をも見せず、すたすたと行つてしまつたが、その真紅の襦袢、脹らかな白い脛、どうも彼女らしい。で、彼れは少し伸び上つて、にたり笑つた。これを書いてしまつたら彼女に遇える。磯の屋では節句を当てこんで、岡山からうんと小間物を仕入れてきたそうだから、彼女に簪でも櫛でも買

つてやる。目顔で呼びだし泉の側の藪へ行くのだ。

二三年前から目星をつけたお竹と、睦じい言葉を交わすようになったのは去年の秋。忘れもしない、彼女が藪下の川で洗濯をしていた。澄んだ水がちょろちょろと草の中から流れでくる。お竹は絞りの手拭を姉様被りにし、幅の広い滑らかな石の上に少し屈んで立ち、足の甲まで水に浸し、両足で調子よく汚れ物を踏んでいた。周囲の人の声もしない。ただ烏が寺の屋根に鳴いているばかり。その時こを絵に書きたいと思つた。その姿もその顔も、この村にや比べる女はありやしない。それで「私の女房になるか」と言うのと、首を横に振らなかつた。あんな別嬪が私の女房になるんだぞ。村の小若連の集会に行くと、吉の野郎は二十歳になつて、まだ街妻一人よう拵えぬ、意気地なしめといつて、皆んなして冷かしやがるが、どうだ羨ましかろう。

彼れはうっとり考えこみ、やがてまたにやりと薄気味悪く笑つて筆を執つた。で、ようやく書き終つたころ、茶釜がジンジン音を立てる。

「吉、お茶が沸いたでえ」と、婆さんは棚から膳と飯櫃を卸している。

「お母、初野はまだ戻らんかな」と、吉松は痺れた足を撫で無で膳の前へ坐つた。米一分の黒々とした麦飯を茶碗に山盛りにし、茶柄杓で茶を打かける。

「彼女は今朝飛び出したきり、まだ戻つてこん、柏餅を早う拵えてくれいとせがんどいて、今までどこを歩いとるんじやろう」

「また皆なに冷かされとるんじやないか、あのあほうに困るなあ、早う死腐れやええのに」

「汝や何をいう、あほうでも狂人でも、汝の真実の妹じゃないか」と、婆さんは鉄漿の斑らな歯で、漬菜をばりばり噛みながら、金壺眼で吉松